



大学教員としてのキャリアパスに立ちはだかる壁 : 大学の多様性に着目した分析

葛城, 浩一

(Citation)

大學教育研究, 31:69-87

(Issue Date)

2023-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100481700>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100481700>



大学教員としてのキャリアパスに立ちはだかる壁 —大学の多様性に着目した分析—

What Blocks Career Paths for Junior Academics?
: Focusing on the Diversity of Universities

葛城 浩一 (神戸大学 大学教育推進機構 准教授)

要旨

本稿では、大学教員としての中核的な役割を期待されるより安定的なポストを目指す者の前に立ちはだかる壁のありようが、機関種間、国立大学間、私立大学間でどのように異なるのか、研究分野と職位も考慮した上で検討を行った。主要な知見は以下の通りである。

第一に、「任期の壁は、教育・研究環境を含む労働条件に相対的に恵まれていない大学で高くなる」という仮説の妥当性は、機関種間（大学）でみると、人文・社会科学系と自然科学系では非常に高いのに対して、医歯薬学系では非常に低いこと等が確認された。

第二に、「研究能力の評価の壁は、研究に対する社会的期待が（教育に対する社会的期待よりも）大きな大学で高くなる」という仮説の妥当性は、機関種間（大学）でみると人文・社会科学系と医歯薬学系では非常に高く、自然科学系では比較的高いこと等が確認された。

第三に、「教育能力の評価の壁は、教育に対する社会的期待が（研究に対する社会的期待よりも）大きな大学で高くなる」という仮説の妥当性は、機関種間（大学）でみると人文・社会科学系と自然科学系では非常に高く、医歯薬学系では比較的高いこと等が確認された。

1. はじめに

大学教員としてのキャリアパスを歩もうとする者には乗り越えなければならない壁が大きく三つ存在する。第一の壁は、専任の初職（想定される職位の典型は助教）に就く際の壁、次なる第二の壁は、専任の初職よりも上位の職位（想定される職位は講師または准教授）に就く際の壁、そして最後の第三の壁は、終身雇用が保証された前職以上の職位（主として想定される職位は教授または准教授）に就く際の壁である。第一の壁、あるいは第二の壁を乗り越えた後、同一組織でエスカレーター式に次なる壁を乗り越えていく者も当然のことながら存在する。しかし、特に若手層にとっては、異なる組織で第二・第三の壁を乗り越えることを余儀なくされる者は少なくない。

さて、本研究の問題関心は、第二の壁と第三の壁の実態の解明にある。すなわち、大学教員としての限定的な役割を期待される不安定なポストではなく、中核的な役割を期待される、より安定的なポストを目指す者の前に、どのような壁がどのように立ちはだかっているのかを具体的に明らかにしたいというのが本研究の問題関心である。

その手始めとして本研究で着目するのは、国立研究開発法人科学技術振興機構が運営する研究人材のためのポータルサイト「JREC-IN Portal」に掲載されている求人公募情報（以下、公募情報）である。葛城（2022）は、この JREC-IN Portal に掲載されている公募情報を用いて、大学教員としての中核的な役割を期待される、より安定的なポストを目指す者の前に立ちはだかる壁の実態の一端を明らかにするための基礎的分析を行った。すなわち、任期の壁と能力評価の壁に着目し、その指標として、前者については「任期の有無」等を、後者については研究能力の評価に相当するものとして「応募資格としての博士の学位の取り扱い」、教育能力の評価に相当するものとして「模擬授業の有無」を取り上げ、その実態が機関種や研究分野、職位といった基本的属性とどのような関係性にあるのかについて検討を行った。しかし、まずは全体的な傾向を捉えることを優先したため、大学の多様性を考慮した分析を行う必要性は認識しつつも、また、上記の基本的属性を掛け合わせた上でより丁寧に分析を行う必要性は認識しつつも、そうした分析を行うまでには至らなかった。

そこで本稿では、大学の多様性を考慮した分析を、上記の基本的属性を掛け合わせた上で行いたい。具体的には、機関種はもちろんのこと、その機能や役割期待によって、大学教員としての中核的な役割を期待される、より安定的なポストを目指す者の前に立ちはだかる壁のありようがどのように異なるのか、研究分野と職位も考慮した上で明らかにしたいと考える。本研究を通じて、大学教員としてのキャリアパスを歩もうとする者が、中長期的な展望をもってその歩みを進めることに資する知見を少しでも提供できればと考える。

2. 研究の方法

2.1 調査の方法

本稿で用いるのは、JREC-IN Portal に 2020 年度に掲載されていた公募情報である。具体的には、「機関種別」で「国立大学」、「公立大学」、「私立大学」に加え、「短期大学」、「専門職大学」、「専門職短期大学」、「高等専門学校」、「専門学校（専修学校専門課程）」という条件で、また「職種」で「教授相当」、「准教授・常勤専任講師相当」という条件で検索をかけてヒットした公募情報を用いる。上記の条件でヒットした公募情報の収集は、2020 年度の 1 年間を通して毎月第 2 週及び第 4 週の半ばに行った。なお、収集に際しては、同じ公募情報が重複するのを避けるために、前回の収集日以降に新規に掲載されたもののみ収集を行った。新規に掲載された公募情報の中には、以前に掲載されていた公募情報の掲載内容が更新されているものも一定数含まれている。そうした公募情報については「データ番号」で特定できるので、もっとも古い公募情報を残して、その後の公募情報は分析対象から除外することとした。その結果、残った公募情報は 9,456 件となった。この 9,456 件が本研究のデータセットである。なお、上記の詳細については葛城（2022）を参照されたい。

本稿では、このデータセットから教育組織とみなされる 8,252 件を抽出し、「人文・社会科学系」、「自然科学系」、「医歯薬学系」に該当する 7,076 件（3,580 件、1,296 件、2,200 件）

のデータを用いる。なお、これらの分類は、公募情報の「研究分野」の「大分類」にデフォルトで設定されている「総合人文社会」、「人文学」、「社会科学」を「人文・社会科学系」に、「総合理工」、「数物系科学」、「化学」、「工学」、「総合生物」、「生物学」、「農学」を「自然科学系」に、「医歯薬学」を「医歯薬学系」にカテゴリ化したものである。

2.2 分析の枠組み

葛城（2022）で行った基礎的分析では、機関種を「大学」と「非大学型高等教育機関」に大括り化している。しかし、一口に「大学」といっても、例えば国立大学と私立大学ではその機能や役割期待が大きく異なるし、また、一口に「国立大学」あるいは「私立大学」といっても、その機能や役割期待が大きく異なることも容易に予想されるところである。

そこで本稿では、機関種間の検討では、葛城（2022）で「大学」と「非大学型高等教育機関」に大括り化する前の分類を用いることとした。具体的には、「国立大学」、「公立大学」、「私立大学」、「短期大学」、「高等専門学校」に分類した。また、国立大学間の検討では、「3つの重点支援の枠組み」¹をその機能の客観的基準として捉え、大学単位で「卓越した教育研究型」、「教育研究型」、「地域貢献型」の3群に分類した。一方の私立大学間の検討では、国立大学のような客観的基準が存在しないため、大学の入学難易度に対応してその役割期待は異なるものとなるとの前提に立ち、偏差値に基づき便宜的に分類した。すなわち、学部単位で偏差値50以上の「教育研究期待型」、偏差値40以上50未満の「教育期待型」、偏差値40未満の「教育期待大型」の3群に分類した。なお、偏差値は『2022年版大学ランキング』（朝日新聞出版）を参照している。

表1は、分析対象ポストの概要を、上記の分類・研究分野・職位ごとに示したものである。なお、1つの公募情報に複数の職位が挙げられているケース（例えば、准教授又は講師）が少なくないため、上記の公募件数とは数が一致しないことを申し添えておく。

次節では、大学教員としての中核的な役割を期待される、より安定的なポストを目指す者の前に立ちだかる壁として、葛城（2022）と同様、任期の壁と能力評価の壁に着目する。その指標として、前者については「任期の有無」を、後者については研究能力の評価に相当するものとして「応募資格としての博士の学位の取り扱い（以下、博士の学位の取り扱い）」、教育能力の評価に相当するものとして「模擬授業の有無」を取り上げ、その実態が機関種間、国立大学間、私立大学間でどのように異なるのか、上記の分類に基づき研究分野と職位も考慮した上で検討を行う。その際の視角として設定するのが、以下に示す3つの仮説である。

¹ 「3つの重点支援の枠組み」とは、各大学の強み・特色を発揮し、機能強化の方向性に応じた取組をきめ細かく支援するために設けられた、運営費交付金配分の3類型化のことである。

表 1 分析対象ポストの概要

		人文・社会科学系			自然科学系			医歯薬学系		
		教授	准教授	講師	教授	准教授	講師	教授	准教授	講師
全体		2037	2914	2274	554	913	482	1200	1098	997
機関種	国立大学	139	426	331	237	353	107	307	145	60
	公立大学	128	218	158	41	82	40	181	189	134
	私立大学	1557	1986	1482	249	363	247	681	718	768
	短期大学	207	252	257	5	7	5	31	45	35
	高等専門学校	6	32	46	22	108	83	0	0	0
国立大学	卓越した教育研究型	42	157	104	133	180	49	105	61	21
	教育研究型	6	22	20	5	24	7	7	1	0
	地域貢献型	91	247	207	99	149	51	195	83	39
私立大学	教育研究期待型	519	617	351	61	104	60	118	39	60
	教育期待型	551	773	626	124	172	129	325	363	388
	教育期待大型	373	475	422	53	75	48	221	304	308

仮説 1. 任期の壁は、教育・研究環境を含む労働条件に相対的に恵まれていない大学で高くなる。すなわち、任期が設けられる割合は、大学間では「私立大学」は「国立大学」に比べ、国立大学間では「地域貢献型」は「卓越した教育研究型」や「教育研究型」に比べ、私立大学間では「教育期待大型」や「教育期待型」は「教育研究期待型」に比べ高くなる。

仮説 2. 研究能力の評価の壁は、研究に対する社会的期待が（教育に対する社会的期待よりも）大きな大学で高くなる。すなわち、博士の学位の取り扱いが必須とされる割合は、大学間では「国立大学」は「私立大学」に比べ、国立大学間では「卓越した教育研究型」や「教育研究型」は「地域貢献型」に比べ、私立大学間では「教育研究期待型」は「教育期待大型」や「教育期待型」に比べ高くなる。

仮説 3. 教育能力の評価の壁は、教育に対する社会的期待が（研究に対する社会的期待よりも）大きな大学で高くなる。すなわち、模擬授業が求められる割合は、大学間では「私立大学」は「国立大学」に比べ、国立大学間では「地域貢献型」は「卓越した教育研究型」や「教育研究型」に比べ、私立大学間では「教育期待大型」や「教育期待型」は「教育研究期待型」に比べ高くなる。

3. 任期の壁の分析

葛城（2022）では、「任期の有無」を任期の壁と考えるならばその壁は、大学に比べ非大学型高等教育機関の方が高く、自然科学系に比べ医歯薬学系や人文・社会科学系の方が高く、教授や准教授に比べ講師の方が高いことを確認している。こうした点をふまえた上で、以下では人文・社会科学系、自然科学系、医歯薬学系の順に、機関種間及び国立大学間、私立大学間で、その壁のありようがどのように異なるのかについてみていきたい。

3.1 人文・社会科学系の「任期の有無」

人文・社会科学系の「任期の有無」について、機関種間及び国立大学間、私立大学間でカイ二乗検定を行った結果を示したのが表2である。なお、網掛け部分は、当該カテゴリのサンプルサイズが小さい（本稿では便宜的に30未満をその基準とした）ため、検討からは除外したことを示すものである（以下同様、なお、参考までに値は示すこととする）。まず、機関種間のうち特に大学間の結果（表2上部）をみると、職位を問わず統計的に有意な差があることがわかる。すなわち、いずれの職位についても「私立大学」はその他2類型に比べ「任期あり」の割合が高く、特に「講師」では4割台半ばに及んでいる。また、国立大学間の結果（表2中部）をみると、こちらは職位を問わず有意な差がないことがわかる。さらに、私立大学間の結果（表2下部）をみると、職位を問わず有意な差があることがわかる。すなわち、いずれの職位についても「教育期待大型」はその他2類型に比べ「任期あり」の割合が高く、特に「講師」では7割を超えている。

表2 人文・社会科学系の「任期の有無」

		教授			准教授			講師		
		任期あり	任期なし		任期あり	任期なし		任期あり	任期なし	
機関種	国立大学	23	97	***	71	266	***	103	195	***
		19.2%	80.8%		21.1%	78.9%		34.6%	65.4%	
	公立大学	36	89		58	150		35	118	
		28.8%	71.2%		27.9%	72.1%		22.9%	77.1%	
	私立大学	524	818		677	1036		595	700	
		39.0%	61.0%		39.5%	60.5%		45.9%	54.1%	
	短期大学	122	56	***	150	74	***	168	70	***
		68.5%	31.5%		67.0%	33.0%		70.6%	29.4%	
	高等専門学校	1	5		2	28		3	40	
		16.7%	83.3%		6.7%	93.3%		7.0%	93.0%	
国立大学	卓越した教育研究型	6	25		14	87		27	53	
		19.4%	80.6%		13.9%	86.1%		33.8%	66.3%	
	教育研究型	1	4		11	9		17	3	
		20.0%	80.0%		55.0%	45.0%		85.0%	15.0%	
	地域貢献型	16	68		46	170		59	139	
		19.0%	81.0%		21.3%	78.7%		29.8%	70.2%	
私立大学	教育研究期待型	53	396	***	69	466	***	47	260	***
		11.8%	88.2%		12.9%	87.1%		15.3%	84.7%	
	教育期待型	197	288		271	405		242	324	
		40.6%	59.4%		40.1%	59.9%		42.8%	57.2%	
	教育期待大型	218	104		279	133		261	105	
		67.7%	32.3%		67.7%	32.3%		71.3%	28.7%	

注：***は $p < 0.001$ 、**は $p < 0.01$ 、*は $p < 0.05$ 。網掛け部分は除外して検討を行った。以下同様。

3.2 自然科学系の「任期の有無」

次に自然科学系の「任期の有無」について、同様の検討を行った結果を示したのが表3である。まず、機関種間のうち特に大学間の結果（表3上部）をみると、職位を問わず有

意な差があることがわかる。すなわち、いずれについても「私立大学」はその他 2 類型に比べ「任期あり」の割合が高く、特に「講師」では 4 割台半ばに及んでいる。また、国立大学間の結果（表 3 中部）をみると、「教授」と「准教授」では有意な差があることがわかる。すなわち、いずれについても「地域貢献型」は「卓越した教育研究型」に比べ「任期あり」の割合が高く、特に「准教授」では 3 割近くに及んでいる。さらに、私立大学間の結果（表 3 下部）をみると、職位を問わず有意な差があることがわかる。すなわち、「教授」と「准教授」では「教育期待大型」はその他 2 類型に比べ「任期あり」の割合が高く、特に「教授」では 5 割台後半に及んでいる。一方、「講師」では「教育期待大型」よりも「教育期待型」の方が「任期あり」の割合がやや高い。

表 3 自然科学系の「任期の有無」

		教授			准教授			講師		
		任期あり	任期なし		任期あり	任期なし		任期あり	任期なし	
機 関 種	国立大学	21	208	***	64	243	***	19	75	***
		9.2%	90.8%		20.8%	79.2%		20.2%	79.8%	
	公立大学	11	29		23	55		9	22	
		27.5%	72.5%		29.5%	70.5%		29.0%	71.0%	
	私立大学	77	146		112	198		94	119	
		34.5%	65.5%		36.1%	63.9%		44.1%	55.9%	
	短期大学	4	1	—	4	3	***	4	1	***
		80.0%	20.0%		57.1%	42.9%		80.0%	20.0%	
	高等専門学校	1	16		9	66		6	50	
		5.9%	94.1%		12.0%	88.0%		10.7%	89.3%	
国 立 大 学	卓越した教育 研究型	2	123	***	20	137	***	7	36	
		1.6%	98.4%		12.7%	87.3%		16.3%	83.7%	
	教育研究型	0	5		5	9		6	1	
		0.0%	100.0%		35.7%	64.3%		85.7%	14.3%	
	地域貢献型	19	80		39	97		6	38	
		19.2%	80.8%		28.7%	71.3%		13.6%	86.4%	
私 立 大 学	教育研究 期待型	4	47	***	5	76	***	14	37	*
		7.8%	92.2%		6.2%	93.8%		27.5%	72.5%	
	教育期待型	41	76		69	87		57	57	
		35.0%	65.0%		44.2%	55.8%		50.0%	50.0%	
	教育期待大型	27	20		31	33		17	23	
		57.4%	42.6%		48.4%	51.6%		42.5%	57.5%	

3.3 医歯薬学系の「任期の有無」

最後に自然科学系の「任期の有無」について、同様の検討を行った結果を示したのが表 4 である。まず、機関種間のうち特に大学間の結果（表 4 上部）をみると、職位を問わず有意な差があることがわかる。すなわち、「教授」では「私立大学」と「国立大学」は「公立大学」に比べ、また「准教授」と「講師」では「国立大学」はその他 2 類型に比べ「任期あり」の割合が高く、特に後者では 7 割台半ばに及んでいる。また、国立大学間の結果（表 4 中部）をみると、こちらも職位を問わず有意な差があることがわかる（ただし、「講師」

は分析対象外)。すなわち、いずれの職位についても「地域貢献型」は「卓越した教育研究型」に比べ「任期あり」の割合が高く、特に「准教授」では8割台半ばに及んでいる。さらに、私立大学間の結果（表4下部）をみると、こちらも職位を問わず有意な差があることがわかる。すなわち、「教授」では「教育期待型」と「教育研究期待型」は「教育期待大型」に比べ、また「准教授」と「講師」では「教育期待型」はその他2類型に比べ「任期あり」の割合が高く、特に「講師」では7割を超えている。

表4 医歯薬学系の「任期の有無」

		教授			准教授			講師		
		任期あり	任期なし		任期あり	任期なし		任期あり	任期なし	
機関種	国立大学	151	141	***	89	28	***	42	13	***
		51.7%	48.3%		76.1%	23.9%		76.4%	23.6%	
	公立大学	63	116		57	125		46	82	
		35.2%	64.8%		31.3%	68.7%		35.9%	64.1%	
	私立大学	342	312		325	327		402	289	
		52.3%	47.7%		49.8%	50.2%		58.2%	41.8%	
	短期大学	15	6	—	20	6	—	19	6	—
		71.4%	28.6%		76.9%	23.1%		76.0%	24.0%	
国立大学	卓越した教育研究型	32	58	***	18	15	***	7	9	—
		35.6%	64.4%		54.5%	45.5%		43.8%	56.3%	
	教育研究型	6	1		0	1		0	0	
		85.7%	14.3%		0.0%	100.0%		—	—	
	地域貢献型	113	82		71	12		35	4	
		57.9%	42.1%		85.5%	14.5%		89.7%	10.3%	
私立大学	教育研究期待型	64	53	*	14	23	***	25	25	***
		54.7%	45.3%		37.8%	62.2%		50.0%	50.0%	
	教育期待型	176	139		191	135		243	103	
		55.9%	44.1%		58.6%	41.4%		70.2%	29.8%	
	教育期待大型	93	113		115	163		128	156	
		45.1%	54.9%		41.4%	58.6%		45.1%	54.9%	

さて、以上の結果を「有意な差」($p<0.05$)という観点で整理したのが表5である。これまでの検討結果では、3群間で有意な差がみられた場合に各群間で有意な差がみられるかまで示していなかったが、「各群間の有意な差」にはその結果まで示している。また、「仮説との対応」には、仮説1（任期の壁は、教育・研究環境を含む労働条件に相対的に恵まれていない大学で高くなる。すなわち、任期が設けられる割合は、大学間では「私立大学」は「国立大学」に比べ、国立大学間では「地域貢献型」は「卓越した教育研究型」や「教育研究型」に比べ、私立大学間では「教育期待大型」や「教育期待型」は「教育研究期待型」に比べ高くなる。）に照らして、それを支持する結果が得られていれば「○」を付している。なお、仮説を支持する結果が得られていない場合には基本的に記号を付さないが、仮説とは対照的な結果（真逆の結果）が得られている場合には「×」を付することとする（以下同様）。

この表をみると、大学間の検討において仮説1を支持する結果は、人文・社会科学系と自然科学系では職位を問わず得られているが、医歯薬学系では職位を問わずまったく得られていないことがわかる。すなわち、大学を対象としたこの仮説の妥当性は、人文・社会科学系と自然科学系では非常に高いのに対し、医歯薬学系では非常に低いということである。また、国立大学間の検討において仮説1を支持する結果は、医歯薬学系では職位を問わず得られており（ただし、「講師」は分析対象外）、自然科学系では複数の職位で得られているが、人文・社会科学系にいたっては職位を問わずまったく得られていないことがわかる。すなわち、国立大学を対象としたこの仮説の妥当性は、医歯薬学系では非常に高く、自然科学系でも比較的高いのに対し、人文・社会科学系では非常に低いということである。さらに、私立大学間の検討において仮説1を支持する結果は、人文・社会科学系では職位を問わず得られており、自然科学系では複数の職位で得られているが、医歯薬学系にいたっては職位を問わずまったく得られていないことがわかる。すなわち、私立大学を対象としたこの仮説の妥当性は、人文・社会科学系では非常に高く、自然科学系でも比較的高い

表5 「任期の有無」についての各群間の有意な差、仮説との対応一覧

			各群間の有意な差	仮説との対応
機関種 (大学)	人文・社会科学系	教授	私立大学＞公立大学・国立大学	○
		准教授	私立大学＞公立大学・国立大学	○
		講師	私立大学＞国立大学＞公立大学	○
	自然科学系	教授	私立大学・公立大学＞国立大学	○
		准教授	私立大学＞国立大学	○
		講師	私立大学＞国立大学	○
	医歯薬学系	教授	私立大学・国立大学＞公立大学	
		准教授	国立大学＞私立大学＞公立大学	
		講師	国立大学＞私立大学＞公立大学	
国立大学	人文・社会科学系	教授		
		准教授		
		講師		
	自然科学系	教授	地域貢献型＞卓越した教育研究型	○
		准教授	地域貢献型＞卓越した教育研究型	○
		講師		
	医歯薬学系	教授	地域貢献型＞卓越した教育研究型	○
		准教授	地域貢献型＞卓越した教育研究型	○
		講師	—	—
私立大学	人文・社会科学系	教授	教育期待大型＞教育期待型＞教育研究期待型	○
		准教授	教育期待大型＞教育期待型＞教育研究期待型	○
		講師	教育期待大型＞教育期待型＞教育研究期待型	○
	自然科学系	教授	教育期待大型＞教育期待型＞教育研究期待型	○
		准教授	教育期待大型・教育期待型＞教育研究期待型	○
		講師	教育期待型＞教育研究期待型	
	医歯薬学系	教授	教育期待型＞教育期待大型	
		准教授	教育期待型＞教育期待大型・教育研究期待型	
		講師	教育期待型＞教育研究期待型・教育期待大型	

に対し、医歯薬学系では非常に低いということである。

4. 能力評価の壁の分析

4.1 研究能力評価の壁の分析

葛城（2022）では、「博士の学位の取り扱い」を研究能力の評価の壁と考えるならばその壁は、非大学型高等教育機関に比べ大学の方が高く、人文・社会科学系や医歯薬学系に比べ自然科学系の方が圧倒的に高く、講師に比べ教授や准教授の方が高いことを確認している。こうした点をふまえた上で、前節と同様に検討を行いたい。

4.1.1 人文・社会科学系の「博士の学位の取り扱い」

人文・社会科学系の「博士の学位の取り扱い」について、同様の検討を行った結果を示したのが表6である。なお、「博士の学位の取り扱い」については、博士の学位を有することが条件のもの（「必須」）、博士の学位と同等の実績や能力が担保されていることが条件のもの（「実績」）、必ずしも博士の学位と同等の実績や能力までは担保されていないもの（「不要」）、そもそも学位についての記載がないもの（「記載なし」）に分類しているが、表にはこのうち前二者の「必須」と「実績」について示している。まず、機関種間のうち特に大学間の結果（表6上部）をみると、職位を問わず有意な差があることがわかる。すなわち、

表6 人文・社会科学系の「博士の学位の取り扱い」

		教授			准教授			講師		
		必須	実績		必須	実績		必須	実績	
機関種	国立大学	41	59	***	106	203	***	50	170	***
		30.1%	43.4%		25.1%	48.0%		15.2%	51.7%	
	公立大学	21	68		28	112		16	77	
		17.4%	56.2%		13.5%	53.8%		10.5%	50.7%	
	私立大学	156	743		191	966		105	691	
		10.4%	49.6%		9.9%	50.3%		7.3%	47.9%	
	短期大学	0	15	***	0	16	***	0	14	***
		0.0%	7.3%		0.0%	6.4%		0.0%	5.5%	
	高等専門学校	0	0		1	2		2	3	
		0.0%	0.0%		3.1%	6.3%		4.3%	6.5%	
国立大学	卓越した教育研究型	19	22	***	72	76	***	33	63	***
		46.3%	53.7%		46.5%	49.0%		32.0%	61.2%	
	教育研究型	3	3		5	13		5	11	
		50.0%	50.0%		22.7%	59.1%		25.0%	55.0%	
	地域貢献型	19	34		29	114		12	96	
		21.3%	38.2%		11.8%	46.3%		5.8%	46.6%	
私立大学	教育研究期待型	83	324	***	103	383	***	46	217	***
		16.1%	62.9%		16.9%	63.0%		13.4%	63.1%	
	教育期待型	24	283		34	410		20	334	
		4.6%	54.1%		4.6%	55.1%		3.3%	54.5%	
	教育期待大型	27	100		32	134		31	114	
		7.6%	28.0%		7.0%	29.3%		7.6%	28.1%	

いずれの職位についても「国立大学」はその他 2 類型に比べ「必須」の割合が高く、特に「教授」では 3 割を超えている。また、国立大学間の結果（表 6 中部）をみると、こちらでも職位を問わず有意な差があることがわかる。すなわち、いずれの職位についても「卓越した教育研究型」は「地域貢献型」に比べ「必須」の割合が高く、特に「教授」と「准教授」では 4 割台半ばに及んでいる。さらに、私立大学間の結果（表 6 下部）をみると、こちらでも職位を問わず有意な差があることがわかる。すなわち、いずれの職位についても「教育研究期待型」はその他 2 類型に比べ「必須」の割合が高いのだが、職位を問わず 1 割台半ばに過ぎない。

4.1.2 自然科学系の「博士の学位の取り扱い」

次に自然科学系の「博士の学位の取り扱い」について、同様の検討を行った結果を示したのが表 7 である。まず、機関種間のうち特に大学間の結果（表 7 上部）をみると、「教授」と「准教授」では有意な差があることがわかる。すなわち、いずれについても「国立大学」はその他 2 類型に比べ「必須」の割合が高く、特に「教授」では 9 割台半ばに及んでいる。また、国立大学間の結果（表 7 中部）をみると、こちらは職位を問わず有意な差がないことがわかる。さらに、私立大学間の結果（表 7 下部）をみると、こちらは職位を問わず有意な差があることがわかる。すなわち、いずれの職位についても「教育研究期待型」はそ

表 7 自然科学系の「博士の学位の取り扱い」

		教授			准教授			講師		
		必須	実績		必須	実績		必須	実績	
機 関 種	国立大学	224	7	***	319	22	***	84	16	
		94.5%	3.0%		90.4%	6.2%		78.5%	15.0%	
	公立大学	35	4		61	15		33	2	
		85.4%	9.8%		74.4%	18.3%		82.5%	5.0%	
	私立大学	167	49		257	64		166	48	
		67.1%	19.7%		71.2%	17.7%		67.8%	19.6%	
	短期大学	0	0	—	1	0	***	1	0	***
		0.0%	0.0%		14.3%	0.0%		20.0%	0.0%	
	高等専門学校	13	0		71	6		48	6	
		61.9%	0.0%		68.3%	5.8%		60.0%	7.5%	
国 立 大 学	卓越した教育 研究型	126	4		166	10		41	4	
		94.7%	3.0%		92.2%	5.6%		83.7%	8.2%	
	教育研究型	4	0		20	3		6	1	
		80.0%	0.0%		83.3%	12.5%		85.7%	14.3%	
	地域貢献型	94	3		133	9		37	11	
		94.9%	3.0%		89.3%	6.0%		72.5%	21.6%	
私 立 大 学	教育研究 期待型	52	6	***	94	6	***	54	3	***
		85.2%	9.8%		90.4%	5.8%		90.0%	5.0%	
	教育期待型	82	28		113	39		78	34	
		66.1%	22.6%		66.1%	22.8%		60.9%	26.6%	
	教育期待大型	25	14		40	19		26	11	
		47.2%	26.4%		54.1%	25.7%		55.3%	23.4%	

の他 2 類型に比べ「必須」の割合が高く、「准教授」と「講師」では 9 割を超えている。

4.1.3 医歯薬学系の「博士の学位の取り扱い」

最後に医歯薬学系の「博士の学位の取り扱い」について、同様の検討を行った結果を示したのが表 8 である。まず、機関種間のうち特に大学間の結果（表 8 上部）をみると、職位を問わず有意な差があることがわかる。すなわち、いずれの職位についても「国立大学」はその他 2 類型に比べ「必須」の割合が高く、職位を問わず 6 割程度に及んでいる。また、国立大学間の結果（表 8 中部）をみると、こちらも職位を問わず有意な差があることがわかる（ただし、「講師」は分析対象外）。すなわち、「准教授」では「卓越した教育研究型」は「地域貢献型」に比べ「必須」の割合が高いのだが、「教授」では同様の傾向はみられず、むしろ「地域貢献型」の方がその割合が高い。さらに、私立大学間の結果（表 8 下部）をみると、こちらも職位を問わず有意な差があることがわかる。すなわち、いずれの職位についても「教育研究期待型」はその他 2 類型に比べ「必須」の割合が高く、特に「教授」では 6 割近くに及んでいる。

表 8 医歯薬学系の「博士の学位の取り扱い」

		教授			准教授			講師		
		必須	実績		必須	実績		必須	実績	
機 関 種	国立大学	189	38	***	83	9	***	32	4	***
		62.2%	12.5%		60.1%	6.5%		59.3%	7.4%	
	公立大学	65	53		39	30		17	20	
		41.1%	33.5%		25.2%	19.4%		14.4%	16.9%	
	私立大学	139	141		72	98		70	70	
		22.9%	23.2%		11.7%	15.9%		10.2%	10.2%	
	短期大学	3	9	***	2	9	***	1	0	***
		10.0%	30.0%		4.5%	20.5%		3.0%	0.0%	
国 立 大 学	卓越した教育 研究型	63	6	***	54	2	***	15	1	—
		60.0%	5.7%		88.5%	3.3%		71.4%	4.8%	
	教育研究型	3	0		1	0		0	0	
		42.9%	0.0%		100.0%	0.0%		—	—	
	地域貢献型	123	32		28	7		17	3	
		64.1%	16.7%		36.8%	9.2%		51.5%	9.1%	
私 立 大 学	教育研究 期待型	69	6	***	18	11	***	27	4	***
		58.5%	5.1%		50.0%	30.6%		49.1%	7.3%	
	教育期待型	46	72		37	45		29	36	
		16.7%	26.1%		12.6%	15.4%		8.8%	10.9%	
	教育期待大型	17	63		16	42		13	30	
		8.5%	31.5%		5.7%	15.1%		4.5%	10.5%	

さて、以上の結果を前節と同様、「有意な差」($p < 0.05$) という観点で整理したのが表 9 である。なお、「仮説との対応」には、仮説 2（研究能力の評価の壁は、研究に対する社会的期待が（教育に対する社会的期待よりも）大きな大学で高くなる。すなわち、博士の学

位の取り扱いが必須とされる割合は、大学間では「国立大学」は「私立大学」に比べ、国立大学間では「卓越した教育研究型」や「教育研究型」は「地域貢献型」に比べ、私立大学間では「教育研究期待型」は「教育期待大型」や「教育期待型」に比べ高くなる。)との対応関係を上述の通り「○」「×」で示している。

この表をみると、大学間の検討において仮説2を支持する結果は、人文・社会科学系と医歯薬学系では職位を問わず得られており、自然科学系では複数の職位で得られていることがわかる。すなわち、大学を対象としたこの仮説の妥当性は、人文・社会科学系と医歯薬学系では非常に高く、自然科学系では比較的高いということである。また、国立大学間の検討において仮説2を支持する結果は、人文・社会科学系では職位を問わず得られているが、自然科学系では職位を問わずまったく得られていないことがわかる。すなわち、国立大学を対象としたこの仮説の妥当性は、人文・社会科学系では非常に高いのに対し、自然科学系では非常に低いということである。なお、医歯薬学系の教授では、むしろ仮説とは対照的な結果が得られている点には留意されたい。さらに、私立大学間の検討において

表9 「博士の学位の取り扱い」についての各群間の有意な差、仮説との対応一覧

			各群間の有意な差	仮説との対応
機関種 (大学)	人文・社会科学系	教授	国立大学・公立大学＞私立大学	○
		准教授	国立大学＞公立大学・私立大学	○
		講師	国立大学＞私立大学	○
	自然科学系	教授	国立大学＞公立大学・私立大学	○
		准教授	国立大学＞公立大学・私立大学	○
		講師		
	医歯薬学系	教授	国立大学＞公立大学＞私立大学	○
		准教授	国立大学＞公立大学＞私立大学	○
		講師	国立大学＞公立大学・私立大学	○
国立大学	人文・社会科学系	教授	卓越した教育研究型＞地域貢献型	○
		准教授	卓越した教育研究型＞地域貢献型	○
		講師	卓越した教育研究型＞地域貢献型	○
	自然科学系	教授		
		准教授		
		講師		
	医歯薬学系	教授	地域貢献型＞卓越した教育研究型	×
		准教授	卓越した教育研究型＞地域貢献型	○
		講師	—	—
私立大学	人文・社会科学系	教授	教育研究期待型＞教育期待大型＞教育期待型	○
		准教授	教育研究期待型＞教育期待大型＞教育期待型	○
		講師	教育研究期待型＞教育期待大型＞教育期待型	○
	自然科学系	教授	教育研究期待型＞教育期待型＞教育期待大型	○
		准教授	教育研究期待型＞教育期待型・教育期待大型	○
		講師	教育研究期待型＞教育期待型・教育期待大型	○
	医歯薬学系	教授	教育研究期待型＞教育期待型＞教育期待大型	○
		准教授	教育研究期待型＞教育期待型＞教育期待大型	○
		講師	教育研究期待型＞教育期待型＞教育期待大型	○

仮説 2 を支持する結果は、研究分野を問わず、また職位を問わず得られている。すなわち、私立大学を対象としたこの仮説の妥当性は、いずれの研究分野においても非常に高いということである。

4.2 教育能力評価の壁の分析

葛城（2022）では、「模擬授業の有無」を教育能力評価の壁と考えるならばその壁は、大学に比べ非大学型高等教育機関の方が高く、医歯薬学系や自然科学系に比べ人文・社会科学系の方が圧倒的に高く、教授に比べ准教授や講師の方が高いことを確認している。こうした点をふまえた上で、これまでと同様に検討を行いたい。

4.2.1 人文・社会科学系の「模擬授業の有無」

人文・社会科学系の「模擬授業の有無」について、同様の検討を行った結果を示したのが表 10 である。まず、機関種間のうち特に大学間の結果（表 10 上部）をみると、職位を問わず有意な差があることがわかる。すなわち、いずれの職位についても「私立大学」はその他 2 類型に比べ「求められる」の割合が高く、いずれについても 6 割台後半に及んでいる。また、国立大学間の結果（表 10 中部）をみると、「准教授」でのみ有意な差があることがわかる。すなわち、「准教授」では「地域貢献型」は「卓越した教育研究型」に比べ

表 10 人文・社会科学系の「模擬授業の有無」

		教授			准教授			講師		
		求められる	求められない		求められる	求められない		求められる	求められない	
機関種	国立大学	57	82	***	240	186	***	173	158	***
		41.0%	59.0%		56.3%	43.7%		52.3%	47.7%	
	公立大学	70	58		104	114		76	82	
		54.7%	45.3%		47.7%	52.3%		48.1%	51.9%	
	私立大学	1032	525		1380	606		988	494	
		66.3%	33.7%		69.5%	30.5%		66.7%	33.3%	
	短期大学	114	93	***	135	117	***	130	127	***
		55.1%	44.9%		53.6%	46.4%		50.6%	49.4%	
	高等専門学校	5	1		25	7		38	8	
		83.3%	16.7%		78.1%	21.9%		82.6%	17.4%	
国立大学	卓越した教育研究型	20	22		81	76	*	49	55	
		47.6%	52.4%		51.6%	48.4%		47.1%	52.9%	
	教育研究型	3	3		7	15		4	16	
		50.0%	50.0%		31.8%	68.2%		20.0%	80.0%	
	地域貢献型	34	57		152	95		120	87	
		37.4%	62.6%		61.5%	38.5%		58.0%	42.0%	
私立大学	教育研究期待型	379	140	***	461	156	*	244	107	
		73.0%	27.0%		74.7%	25.3%		69.5%	30.5%	
	教育期待型	345	206		529	244		419	207	
		62.6%	37.4%		68.4%	31.6%		66.9%	33.1%	
	教育期待大型	244	129		320	155		281	141	
		65.4%	34.6%		67.4%	32.6%		66.6%	33.4%	

「求められる」の割合が高く、6割を超えている。さらに、私立大学間の結果(表10 下部)をみると、「教授」と「准教授」では有意な差があることがわかる。すなわち、いずれについても「教育研究期待型」はその他2類型に比べ「求められる」の割合が高く、いずれも7割を超えている。

4.2.2 自然科学系の「模擬授業の有無」

次に自然科学系の「模擬授業の有無」について、同様の検討を行った結果を示したのが表11である。まず、機関種間のうち特に大学間の結果(表11 上部)をみると、職位を問わず有意な差があることがわかる。すなわち、「教授」では「私立大学」と「公立大学」は「国立大学」に比べ、また「准教授」と「講師」では「公立大学」はその他2類型に比べ「求められる」の割合が高く、特に「講師」では4割台後半に及んでいる。また、国立大学間の結果(表11 中部)をみると、「教授」と「講師」では有意な差があることがわかる。すなわち、いずれについても「地域貢献型」は「卓越した教育研究型」に比べ「求められる」の割合が高く、特に「講師」では3割を超えている。さらに、私立大学間の結果(表11 下部)をみると、「教授」と「准教授」では有意な差があることがわかる。すなわち、「教育期待大型」はその他2類型に比べ「求められる」の割合が高く、特に「教授」では5割を超えている。

表11 自然科学系の「模擬授業の有無」

		教授			准教授			講師		
		求められる	求められない		求められる	求められない		求められる	求められない	
機関種	国立大学	29	208	***	60	293	***	19	88	***
		12.2%	87.8%		17.0%	83.0%		17.8%	82.2%	
	公立大学	14	27		34	48		18	20	
		34.1%	65.9%		41.5%	58.5%		47.4%	52.6%	
	私立大学	90	159		126	237		92	155	
		36.1%	63.9%		34.7%	65.3%		37.2%	62.8%	
	短期大学	0	5	—	0	7	***	0	5	***
		0.0%	100.0%		0.0%	100.0%		0.0%	100.0%	
	高等専門学校	15	7		87	21		69	14	
		68.2%	31.8%		80.6%	19.4%		83.1%	16.9%	
国立大学	卓越した教育研究型	10	123	**	29	151		2	47	***
		7.5%	92.5%		16.1%	83.9%		4.1%	95.9%	
	教育研究型	0	5		2	22		0	7	
		0.0%	100.0%		8.3%	91.7%		0.0%	100.0%	
	地域貢献型	19	80		29	120		17	34	
		19.2%	80.8%		19.5%	80.5%		33.3%	66.7%	
私立大学	教育研究期待型	14	47	**	25	79	**	17	43	
		23.0%	77.0%		24.0%	76.0%		28.3%	71.7%	
	教育期待型	47	77		66	106		51	78	
		37.9%	62.1%		38.4%	61.6%		39.5%	60.5%	
	教育期待大型	28	25		34	41		23	25	
		52.8%	47.2%		45.3%	54.7%		47.9%	52.1%	

4.2.3 医歯薬学系の「模擬授業の有無」

最後に医歯薬学系の「模擬授業の有無」について、同様の検討を行った結果を示したのが表 12 である。まず、機関種間のうち特に大学間の結果（表 12 上部）をみると、職位を問わず有意な差があることがわかる。すなわち、いずれの職位についても「私立大学」はその他 2 類型に比べ「求められる」の割合が高く、特に「教授」では 2 割台半ばに及んでいる。また、国立大学間の結果（表 12 中部）をみると、こちらも職位を問わず有意な差があることがわかる（ただし、「講師」は分析対象外）。すなわち、いずれの職位についても「卓越した教育研究型」は「地域貢献型」に比べ「求められる」の割合が高く、特に「准教授」では 4 割を超えている。さらに、私立大学間の結果（表 12 下部）をみると、「教授」でのみ有意な差があることがわかる。すなわち、「教育期待大型」はその他 2 類型に比べ「求められる」の割合が高く、3 割を超えている。

表 12 医歯薬学系の「模擬授業の有無」

		教授			准教授			講師		
		求められる	求められない		求められる	求められない		求められる	求められない	
機 関 種	国立大学	27	280	***	27	118	***	2	58	***
		8.8%	91.2%		18.6%	81.4%		3.3%	96.7%	
	公立大学	23	158		19	170		12	120	
		12.7%	87.3%		10.1%	89.9%		9.1%	90.9%	
	私立大学	180	499	172	544	168	592			
		26.5%	73.5%	24.0%	76.0%	22.1%	77.9%			
	短期大学	5	26	***	5	40	***	2	33	***
		16.1%	83.9%		11.1%	88.9%		5.7%	94.3%	
国 立 大 学	卓越した教育 研究型	22	83	***	25	36	***	2	19	—
		21.0%	79.0%		41.0%	59.0%		9.5%	90.5%	
	教育研究型	1	6		1	0		0	0	
		14.3%	85.7%		100.0%	0.0%		—	—	
	地域貢献型	4	191		1	82		0	39	
		2.1%	97.9%		1.2%	98.8%		0.0%	100.0%	
私 立 大 学	教育研究 期待型	13	105	***	10	29		10	48	
		11.0%	89.0%		25.6%	74.4%		17.2%	82.8%	
	教育期待型	89	234		82	279		86	300	
		27.6%	72.4%		22.7%	77.3%		22.3%	77.7%	
	教育期待大型	75	146		79	225		71	233	
		33.9%	66.1%		26.0%	74.0%		23.4%	76.6%	

さて、以上の結果をこれまでと同様、「有意な差」($p < 0.05$) という観点で整理したのが表 13 である。なお、「仮説との対応」には、仮説 3（教育能力の評価の壁は、教育に対する社会的期待が（研究に対する社会的期待よりも）大きな大学で高くなる。すなわち、模擬授業が求められる割合は、大学間では「私立大学」は「国立大学」に比べ、国立大学間では「地域貢献型」は「卓越した教育研究型」や「教育研究型」に比べ、私立大学間では「教

育期待大型」や「教育期待型」は「教育研究期待型」に比べ高くなる。)との対応関係を上述の通り「○」「×」で示している。

この表をみると、大学間の検討において仮説3を支持する結果は、人文・社会科学系と自然科学系では職位を問わず得られており、医歯薬学系では複数の職位で得られていることがわかる。すなわち、大学を対象としたこの仮説の妥当性は、人文・社会科学系と自然科学系では非常に高く、医歯薬学系では比較的高いということである。また、国立大学間の検討において仮説3を支持する結果は、自然科学系では複数の職位で得られているが、医歯薬学系では職位を問わずまったく得られておらず、むしろ仮説とは対照的な結果が得られていることがわかる。すなわち、国立大学を対象としたこの仮説の妥当性は、自然科学系では比較的高いのに対し、医歯薬学系では非常に低いということである。さらに、私立大学間の検討において仮説3を支持する結果は、自然科学系では複数の職位で得られているが、人文・社会科学系では職位を問わずまったく得られておらず、特に教授と准教授ではむしろ仮説とは対照的な結果が得られていることがわかる。すなわち、私立大学を対

表13 「模擬授業の有無」についての各群間の有意な差、仮説との対応一覧

			各群間の有意な差	仮説との対応
機関種 (大学)	人文・社会科学系	教授	私立大学>公立大学>国立大学	○
		准教授	私立大学>国立大学>公立大学	○
		講師	私立大学>国立大学・公立大学	○
	自然科学系	教授	私立大学・公立大学>国立大学	○
		准教授	公立大学・私立大学>国立大学	○
		講師	公立大学・私立大学>国立大学	○
	医歯薬学系	教授	私立大学>公立大学・国立大学	○
		准教授	私立大学・国立大学>公立大学	
		講師	私立大学>公立大学・国立大学	○
国立大学	人文・社会科学系	教授		
		准教授	地域貢献型>卓越した教育研究型	○
		講師		
	自然科学系	教授	地域貢献型>卓越した教育研究型	○
		准教授		
		講師	地域貢献型>卓越した教育研究型	○
	医歯薬学系	教授	卓越した教育研究型>地域貢献型	×
		准教授	卓越した教育研究型>地域貢献型	×
		講師	—	—
私立大学	人文・社会科学系	教授	教育研究期待型>教育期待大型・教育期待型	×
		准教授	教育研究期待型>教育期待型・教育期待大型	×
		講師		
	自然科学系	教授	教育期待大型・教育期待型>教育研究期待型	○
		准教授	教育期待大型・教育期待型>教育研究期待型	○
		講師		
	医歯薬学系	教授	教育期待大型・教育期待型>教育研究期待型	○
		准教授		
		講師		

象としたこの仮説の妥当性は、自然科学系では比較的高いのに対し、人文・社会科学系では非常に低いということである。

5. まとめと考察

本稿では、大学教員としての中核的な役割を期待される、より安定的なポストを目指す者の前に立ちはだかる壁として任期の壁と能力評価の壁に着目し、その実態が機関種間、国立大学間、私立大学間でどのように異なるのか、研究分野と職位も考慮した上で検討を行った。検討の結果を仮説との対応に基づき整理したのが表 14 である。「仮説との対応」には、仮説を支持する結果が職位を問わず得られていれば「○」を、複数の職位で得られていれば「△」を付している。一方、仮説を支持する結果が得られていないどころか仮説とは対照的な結果が複数の職位で得られていれば「×」を付している。なお、表 5、9、13 で用いた符号とは意味合いが異なるので留意されたい。

表 14 仮説との対応一覧

			仮説との対応	仮説で想定する関係性
任期の有無	機関種(大学)	人文・社会科学系	○	私立大学＞国立大学
		自然科学系	○	
		医歯薬学系		
	国立大学	人文・社会科学系		地域貢献型＞卓越した教育研究型(・教育研究型)
		自然科学系	△	
		医歯薬学系	○	
	私立大学	人文・社会科学系	○	教育期待大型・教育期待型＞教育研究期待型
		自然科学系	△	
		医歯薬学系		
博士の学位の取り扱い	機関種(大学)	人文・社会科学系	○	国立大学＞私立大学
		自然科学系	△	
		医歯薬学系	○	
	国立大学	人文・社会科学系	○	卓越した教育研究型(・教育研究型)＞地域貢献型
		自然科学系		
		医歯薬学系		
	私立大学	人文・社会科学系	○	教育研究期待型＞教育期待大型・教育期待型
		自然科学系	○	
		医歯薬学系	○	
模擬授業の有無	機関種(大学)	人文・社会科学系	○	私立大学＞国立大学
		自然科学系	○	
		医歯薬学系	△	
	国立大学	人文・社会科学系		地域貢献型＞卓越した教育研究型(・教育研究型)
		自然科学系	△	
		医歯薬学系	×	
	私立大学	人文・社会科学系	×	教育期待大型・教育期待型＞教育研究期待型
		自然科学系	△	
		医歯薬学系		

この結果をみると、同じ研究分野であっても、機関種で括るのか、それとも国立大学あるいは私立大学で括るのかによって、仮説との対応のありようが大きく異なっていることが改めてわかる。また、仮説の当てはまり具合は、いずれの括りであったとしても研究能力の評価に相当する「博士の学位の取り扱い」では比較的良いのに対して、教育能力の評価に相当する「模擬授業の有無」ではあまり良いとはいえないこともわかるだろう。すなわち、人事においてこれまで重視されてきた「研究」については仮説に提示したようなわかりやすい関係性で説明が付きやすいのに対して、(相対的には)重視されてこなかった「教育」については仮説に提示したようなわかりやすい関係性では説明が付きにくいということである。本稿の最後に、特に「教育」について仮説とは対照的な結果が得られた「×」に着目し、なぜこのような結果が得られたのかについて考察してみたい。

まず、国立大学の医歯薬学系で「地域貢献型」よりも「卓越した教育研究型」の方が模擬授業を課す割合が高い理由について考察してみよう。そこには、医歯薬学系の教員に期待される主たる業務の特殊性と、各大学の財政事情とが関係していると考えられる。すなわち、医歯薬学系の教員に期待される主たる業務は、「教育」と「研究」、そして「臨床」であるため、医歯薬学系はそもそも他の研究分野に比べると「教育」が重視されにくい構造下にある。このことは表 10・11・12 からもうかがえよう。そうした医歯薬学系にあって、より財政的に苦しい立場にある「地域貢献型」の大学では、収入に直結する「研究」や「臨床」がより重視されやすくなるため、結果的に「教育」がより重視されにくくなっているものと考えられる。これに対して、財政的に恵まれた立場にある「卓越した教育研究型」の大学では、そもそも「研究」や「臨床」において能力の高い人材を確保しやすいため、「教育」にも配慮する余裕が少なからずあるのではないかと考えられる。

次に、私立大学の人文・社会科学系で講師を除く職位において「教育期待大型」や「教育期待型」よりも「教育研究期待型」の方が模擬授業を課す割合が高い理由について考察してみよう。そこには、人文・社会科学系を構成する「教育系」という下位分野が少なからず関係していると考えられる。すなわち、「教育系」という下位分野は、「教育する立場に立つ者を教育する」という性格を持つため、それにふさわしい教授スキルが求められやすい構造下にあると考えられる。特にそれが求められやすいのは、実際に教壇に立って教育を行う（初等・中等教育の）教員を養成する学部であると考えられるが、そうした学部は基本的に偏差値が高く、だからこそ「教育研究期待型」では「教育期待大型」や「教育期待型」よりも模擬授業が重視されやすくなっているものと考えられる²。ただし、人文・社会科学系に占める「教育系」の割合がそう大きなものではないことに鑑みれば、この解釈で十分であるとは考えていない。すなわち、他に妥当な解釈があるとは考えられるが、

² 本来であればその検証を行いたいところであるが、「教育系」であるか否かを特定するのに多くの時間を要するため他日を期すこととしたい。

残念ながら現時点でそれを見出すまでには至っていない。今後は、人文・社会科学系の有識者への聞き取り調査等を手掛かりに、その妥当な解釈を明らかにできればと考える。

以上、仮説とは対照的な結果が得られた「×」に着目し、なぜそのような結果が得られたのかについて考察してきたわけであるが、必ずしも十分な解釈ができたわけではない。また、仮説を支持する結果が複数の職位で得られていない部分についてはまったく考察ができていない。今後は、こうした点についての考察も進めていきたいと考える。

付記

本稿は、令和2～5年度科学研究費補助金基盤研究(C)「ユニバーサル化時代における学士課程教育の質保証のあり方に関する総合的研究」(研究代表者：葛城浩一)による研究成果の一部である。

参考文献

葛城浩一(2022)「大学教員としてのキャリアパスに立ちはだかる壁—JREC-IN Portal 掲載の公募情報を用いた基礎的分析」『大学教育研究』第30号、pp.49-64.